

自閉症児における教示要求行動の課題般化に関する要因の検討

専攻 特別支援教育学専攻
コース 心身障害コース
学籍番号 M09104A
氏名 山本 真也

I. 目的

本研究の目的は、教示要求行動の形成訓練において、訓練される課題から訓練されない課題への課題般化においてそれらの要因(弁別刺激と反応型)がどのように機能するか分析する。また、教示要求行動の形成における般化要因を検討する。

II. 方法

1. 対象児、セッティング

A 大学相談施設に来所する自閉症男児 1 名が本研究に参加した。本研究の開始当初、対象児の年齢は 7 歳だった。また、対象児が 5 歳 3 カ月時に受けた新版 K 式発達検査 2001 の結果より、対象児の発達年齢は 1 歳 9 カ月であった。また、対象児は他者からの促しがあれば、一語文での要求が可能であった。また、多くの単語を叙述することが可能であり、時折三語文ほどの長い文章も話す様子が観察された。また、音声による模倣も可能であった。セッションを原則 2 週間に 1 回行った。

2. 手続き

1) 既知刺激・未知刺激アセスメント

メイントレーナーは対象児に複数の写真カードを提示し、対象児が 3 回連続正反応だった写真カードを既知刺激、3 回連続誤反応だった写真カードを未知刺激とした。

2) 写真カード命名課題による教示要求行動形成訓練

対象児の教示要求行動を形成するために、対象

児に写真カード命名課題を行った。トレーナーは写真カードを対象児に提示し、その名称を答えるよう求めた。対象児にとって未知である写真カードを提示した時、対象児には「おしえて」と言うことを求めた。ただし、予め査定した未知刺激を提示した時、トレーナーは「おしえて」と言語モデルを示した。言語モデルは、1 秒、3 秒、5 秒の間隔で時間遅延法を用いて示した。

3) 要因分析プロープ(1)

教示要求行動がどの課題に般化したか確認した。このフェイズで用いられた課題は、三項随伴性の枠組みから 4 つの型に分類した。Fig.1 に 4 つの型の模式図を示した。それぞれの課題は、A 型は「カードに描かれた形の名称を答える形カード命名課題」

「カードに描かれた絵の名称を答える絵カード命名課題」、B 型は「カードを特定の基準で分ける分類課題」「カードに描かれた数列の中の空白に数字をはめ込む数穴埋め課題」、C 型は「箱の中に手を入れ、中に入っている物品を答える触覚による物当て課題」「提示された実物の名称を答える実物命名課題」、D 型は「机に並べられた物品の内、指示されたものを取る聴覚—視覚マッチング課題」「指示された数字(「126」や「28」など)通りに数字を並べる数字づくり課題」だった。

4) 絵カード命名課題による教示要求行動形成訓練

絵カードのもとで教示要求行動を形成した。マテリアルに絵カードを用いたこと以外は、手続きは

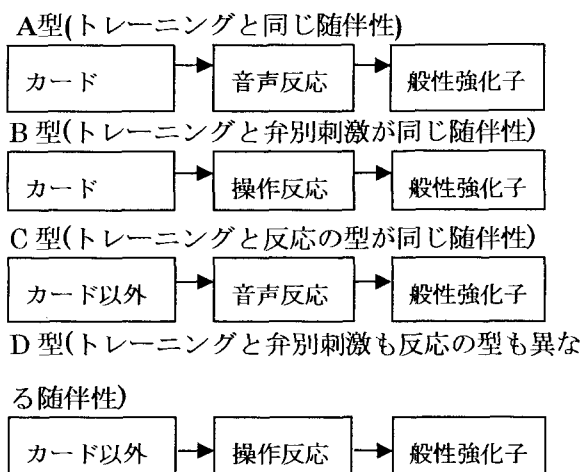


Fig.1 各課題の型の模式図

写真カードトレーニングと同じだった。

5) A型随伴性プローブ

教示要求行動が形カードに般化したか確認する目的で行った。マテリアルに形カードを用いたこと以外は、手続きは写真カードプローブと同じだった。

6) 要因分析プローブ(2)

教示要求行動がどの課題に般化したか確認した。課題のうち、B型、C型、D型を6種類行った。

III. 結果

写真カード命名課題による教示要求行動形成訓練における教示要求行動は15セッションで形成された。

要因分析プローブ(1)、A型随伴性プローブ、要因分析プローブ(2)の結果をFig.2に示した。要因分析プローブ(1)では、絵カード命名課題と触覚による物当て課題で少しの般化が見られたものの、その他の課題には全く般化を示さなかった。絵カード命名課題による教示要求行動形成訓練において絵カードのもとで教示要求行動を自発できるようになった後に行ったA型随伴性プローブでは100%の正反応率を示した。また、要因分析プローブ(2)においては、分類課題は0%、数穴埋め課題は0%、触覚による物当て課題は80%、実物命名課題は100%、聴覚—視覚マッチング課題は0%、

数字づくり課題は0%の正反応率を示した。すなわち、C型随伴性の課題には般化した、B型随伴性とD型随伴性の課題には般化しなかった。

IV. 考察

本研究は、自閉症児の教示要求行動に関する課題般化について、三項随伴性の観点から分析した。対象児は、写真カード命名課題による教示要求行動形成訓練の時点においては、自発する教示要求行動の弁別刺激が「写真カード」であったことが考えられる。絵カード命名課題による教示要求行動形成訓練後、A型随伴性の課題とC型随伴性の課題に教示要求行動を般化させた。A型随伴性とC型随伴性は、Fig.1によると、写真カード命名課題による教示要求行動形成訓練と反応の型のみが同じ随伴性である。すなわち、本研究の対象児の教示要求行動は、反応の型が同じ随伴性の課題に般化したということである。このことにより、教示要求行動の課題般化にとっては、課題を正しく遂行した時の弁別刺激よりも反応の型が重要な要因である可能性が示唆された。

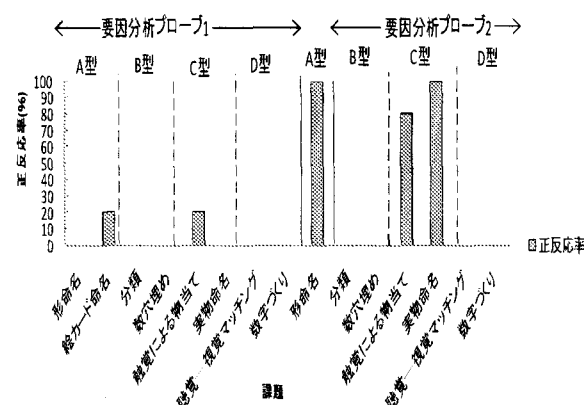


Fig.2 プローブの正反応率

主任指導教員 井澤信三
指導教員 井澤信三